河北新報

2009年（平成21年）
5月2日（土）
夕刊

河北新報社
仙台市青葉区五橋1-2-28
（郵便番号 980-8660）
電話（022）211
総合案内 1111
読者相談室 1447
夕刊編集部 1146

街いま

再生 公園も住民の輪も

荒れた沼一変 桜の庭に

「大変だったけど、多くの人に支えられたね」。見違えるようにきれいになった将監沼の前で語り合う育む会の奈須野さん（右から2人目）ら＝4月19日

荒れ放題だった公園の再生を目的にした住民ボランティア活動が、六年目に入った。生まれ変わったのは公園だけではない。開発から四十年近くたち、失われつつあった団地内のコミュニティーもそうだ。仙台市泉区の将監地区で、地域の自然資源を磁力に住民同士がつながりを紡ぎ直している。

四月初旬、「将監風致公園」の桜並木が満開になった。親子連れが歩道を埋め、ベンチの近くでは若者が写真を撮り、遊歩道の斜面には弁当を広げる家族の姿があった。

将監沼を中心としたこの公園は、数年前まで地域住民が寄りつかない場所だった。木や雑草が生い茂り、昼でも暗く、辺りから様子がまったく見えない。小学校の危険区域にも指定されていた。

市民による再生活動が始まったのは二〇〇四年春。将監町内会自治会連絡協議会が設立三十周年を記念して開いた「さくらまつり」の盛況がきっかけだった。公園が、多くの人が触れ合う地域の資源であることを再認識した住民有志は、ボランティア団体「将監沼の自然とふれあいを育（はぐくん）む会」を結成した。

「公園とは名ばかり。本当にひどいありさまでした」。会事務局長の高橋節子さん（六六）が振り返る。垂れ下がったツタを切り、腰が埋まるほどの草を刈り、立ち枯れたナラの木を伐採した。急な斜面で投げ捨てられたゴミを拾い続けた。「道路から沼が見えるようになるまで三年ぐらいかかったかな」と高橋さん。

当初の参加者は百三十人ほど。サラリーマン、主婦、学生、定年を迎えた人たち。幅広い年代の人たちが、得意分野を生かして活動を支えた。

田村全さん（六二）もその一人。父や祖父が里山を手入れする姿を見て育った田村さんは、そのノウハウを生かして

広がる情熱 地域に活力

仙台市は、育む会の意向を反映して公園の整備に取りかかっている。歩道脇の広場は、桜を楽しむ市民でいっぱいだった＝４月12日

いる。「自然環境は人の手で守られている面もあるんです」。他の会員と協力して、間伐材で遊歩道の階段やベンチを作った。

前会長の樋口稔夫さん(七〇)が言う。「活動を始めるまで、公園に名前があることも知りませんでした。この地域にすばらしい人材がたくさんいることも」

将監団地で入居が始まったのは一九七〇年。生まれたての地域が持つ活力と共同体意識は、時代の変化や団地の肥大化で徐々に薄れていった。第一世代の樋口さんや高橋さんには、こうした現状への危機感があった。

地域を活性化したいという樋口さんらの思いは、静かに、そして確実に周囲の住民へと広がっていった。

樋口さんが活動の意義を振り返る。「情熱や能力を発揮する機会のなかった人たちに、力を出す場をつくったと思います」。田村さんも「仲間が増え、住民同士のつきあいが広がっています」と言う。第二、第三世代も少しずつ活動に参加し始めている。

育む会は、賛助会員などを含めると一千人を超す規模になった。地区外の会員も多い。公園を会場にした「さくらまつり」は、会の主催となり毎年続いている。沼のほとりで開くコンサートの出演者も、人脈をフル活用している。団地の歴史研究家に依頼して始めた勉強会も定着した。

現会長の奈須野隆宏さん(六九)はしみじみと言う。「将監沼再生という活動を通して地域の人たちが結びつきを強め、団地は再び活力を取り戻そうとしています。沼は地域の宝だったんですね」

(夕刊編集部・安倍樹)